

就学前後の子どもが感じる幼小の違いに関する研究

－ 5歳と1年生時点での子どものインタビューを通して－

椋 田 善 之

(兵庫教育大学研究生：学校法人 秀英学園 光徳幼稚園)

鈴 木 正 敏

(兵庫教育大学)

本研究は、幼児期から小学校への教育の接続と連続性を確保するため、実際に移行を経験した子どもたちへの継続的なインタビューを通して、子どもの視点から見た幼稚園と小学校の違いを明確にし、幼稚園と小学校における連携活動及び教育がどうあるべきかを示すことを目的とした。調査の結果、子どもたちは第1子か第2子以降かで小学校入学に関する情報量の差が見られた。その中で、子どもたちは学校の物理的環境について期待や違和感を感じていたり、知らない子と一緒にいることに不安を抱いていたりすることが明らかとなった。また、小学校に比べ幼稚園の学習環境や保育内容が乏しいことなども指摘された。

キーワード：幼稚園，小学校，幼小連携，移行期，インタビュー

椋田 善之：学校法人 秀英学園 光徳幼稚園，〒601-8464 京都市南区唐橋高田町59

鈴木 正敏：兵庫教育大学大学院・基礎教育学系・准教授，〒673-1421 兵庫県加東市山国207-109，兵庫教育大学・学校教育研究センター，E-mail: suzukimj@hyogo-u.ac.jp

How Preschool and School Children View the Differences between Kindergarten and Elementary School: Interviewing Children at the Time of 5-Year Old and 1st Grade

Yoshiyuki Mukuda

(Research Student, Hyogo University of Teacher Education: Kotoku Kindergarten)

Masatoshi Suzuki

(Hyogo University of Teacher Education)

This study is to clarify differences between kindergarten and elementary school, viewed by the children who experienced transition between those schools, and to have some suggestions for kindergarten-elementary school collaborations and continuity between those schools. The authors interviewed children before and after their entering elementary school. As a result, 1st-born children had less information about elementary school compared to 2nd- and later-born children. Then, they had perceptions on physical environment of elementary school, and had anxieties about meeting new children. Also, they pointed out that kindergarten does not have rich environment or activities which are intellectually stimulating to them.

Key Words: Kindergarten, Elementary School, Kindergarten-Elementary School Collaboration, Transition, Interview

Yoshiyuki Mukuda: Research Student, Hyogo University of Teacher Education, Kotoku Kindergarten, Harahashi Takada-cho, Minami-ku, Kyoto, 601-8464, Japan

Masatoshi Suzuki: Associate Professor, Center for School Education Research, Hyogo University of Teacher Education, 2007-109, Yamakuni, Kato-city, Hyogo, 673-1421, Japan. E-mail: suzukimj@hyogo-u.ac.jp

1. 問題の所在と研究目的

近年、小学校に進学した子どもが適応できず授業が成立しない状況がしばしば見られるようになってきている(吉田, 2005)。その理由として、幼稚園と小学校との教育方法・カリキュラムの「段差」が指摘されている(西山, 2002)。その「段差」を解消するために、これまで教師や保護者を対象とした研究が行われてきた(たとえば 林, 1995; 細川ら, 1998)。

この問題に関して、イギリスなどでは実際に子どもを対象とした多くの調査研究がなされている。例えば、Sandersら(2005)は、子どもにインタビューを行うことによって、子どもの視点から幼児教育プログラムと小学校との差を見出している。この研究では、まず初めに幼稚園へ通っている子どもたちにインタビューを行い、その1年後、小学校へ通い出した同じ子どもたちに再度インタビューによって、幼稚園と小学校のギャップを聞いている。

しかし、こういった手法をとった研究は日本では数少ない。その数少ない研究の中でも進野ら(2000)の研究では子どもたちを対象としてインタビューが行われていたが、Sandersらが行ったような継続的な研究ではない。他の類似した研究でも、「段差」を捉える研究でなかったり、インタビューではなくアンケート調査であったりした。よって、日本の子どもたちの声をよりの確に反映するためには、さらなる検討が必要であるといえる。

そこで、本研究では、このような継続的な子どもへのインタビューを日本の幼稚園と小学校で実施し、子どもの視点から見た幼稚園と小学校の違いを明確にする。そして、幼稚園と小学校における連携活動及び教育がどうあるべきかを示すことを目的とする。

2. 研究方法

調査対象は兵庫県内K幼稚園に通う5歳児(調査開始時点)15名(男児*名, 女児*名)である。実施期間は幼稚園在籍時の2007年1月18日・19日と、小学校へ進学してからの2007年6月9日～13日に行った。調査の実施場所は、幼稚園では園長室と会議室、小学校ではPC室とした。対象者は、幼稚園教師からの推薦で、大人に対して話ができるような子どもたち数名を選択した。

子どもたちは、2名または3名で調査者の前に座り、絵を描きながら聞き取りを行った。質問項目については、Sanders(2005)らの研究と進野(2000)らの研究を参考にし、筆者らが作成した。

3. 分析と結果

子どもたちを対象に行ったインタビューの結果、その内容を以下の10項目に分類し、分析を行った。それらは：(1) 幼児の小学校に対する認識 (2) 幼児の勉強に対する認識 (3) 出生順位による小学校に対する認識の違い (4) 出生順位による勉強に対する認識の違い (5) 幼児の小学校への不安 (6) 児童が振り返って感じる小学校への不安 (7) 幼児の小学校への期待とその後の不満 (8) 児童の小学校での不満 (9) 児童の幼稚園に対する認識と不満 (10) 児童の視点から見た幼小の違い、である。

(1) 幼児の小学校に対する認識

まず初めに、小学校に対する認識については、「もうじき小学校に入学するけれど、小学校ってどんなところだと思う?」という質問に対する回答について分析を行った。文字化された回答を第一子と第二子以降の幼児のものに分け、文字数と単語数をカウントした結果、それぞれの会話量(文字数から算出)と情報量(単語数から算出)について差が見られた。表1は、一人ひとりの各項目に対する回答一項目当たりの文字数の平均値と、小学校について説明をする際のキーワード(机, 建物, 勉強など)となる単語数の平均値を示したものである。

表1 第一子・第二子以降の児童による回答の会話量と情報量の差

第一子／ 第二子以降	会話量 (文字数)	情報量 (単語数)
第一子	28	2
第二子以降	56	4

※ 一人当たりの会話量(文字数)の平均値と(情報量)単語数の平均値

このように、小学校のイメージを聞く質問に対して、第一子は第二子以降の幼児と比べ、文字数も単語数も少なかった。つまり、第二子以降の幼児は第一子の幼児よりも小学校に対する多くの情報を持っていると言える。事実、第二子以降同士のペアでインタビューを行うと、会話が弾み、様々な小学校のイメージなどを聞き出すことができた。

次に、小学校のイメージが実際に幼児の発話の中でどのような言葉で表現されているかについて、大まかに分類し、表2に示した。

表2 幼児の小学校に対する認識

	回答数
勉強のイメージ	5
身体的活動をしているイメージ	7
物理的環境をイメージしたもの (屋外)	18 (屋外) 11
(屋内)	(屋内) 7
対人関係のイメージ	4
学校での生活をイメージしたもの	6
一緒に行動をするというイメージ	2

これらを見ると、幼児は小学校の様々なイメージを捉えていることがわかる。一番多い回答は、小学校の物理的環境をイメージしたものであった。その中でも、＜屋内の環境＞と＜屋外の環境＞を述べた回答がそれぞれあり、＜屋外の環境＞の方がより多かった。筆者らの予想では、勉強や机に座るといったイメージが多いのではないかと考えていたが、それに反して勉強について述べた幼児は多くなく、また机に座るイメージは全く無かった。

(2) 幼児の勉強に対する認識

次に幼児の勉強に対する認識がどれほどあるかを分析する。幼児へのインタビューでは、「勉強するってどんなことだと思う？」という質問をしており、その結果は以下の通りとなった。

・幼児の勉強に対するイメージ(□内は回答数)

(保護者から得たイメージ) [6] ・「生きるため[2]」「先生に怒られるとか」「将来漢字をしていないと大変なことが起きるから」「頭を良くすること、験とか大人になっても忘れないように」「先生のいうことをよく聞いて勉強すること」
(きょうだいから得たイメージ) [6] ・「漢字とか、あと国語」「実験したり、米作っている人にどないして作るんですかって聞いたりする」「お兄ちゃんが実験してるから。実験やったら、水でなんか、お兄ちゃんが水で勉強してる」「算数」「十円玉を下に置いて、削って十円玉出てくるとか」「頭に入ったことを足すしたりとか、そういうこと」
(その他の人から得たイメージ) [6] ・「勉強とかして、いろんなこと考えて、足し算とか、引き算とか」「嫌や、遊ぶのが楽しい」「頭が鍛えるところ」「足し算」「算数好き、国語とかは嫌や」「勉強あんまりしたくない」

このように、勉強のイメージは大まかに分類すると、三項目のイメージに分けることができ、三つともほぼ同等量の回答数があった。そして、幼児は「保護者やきょう

うだいやその他の人」から情報を得ていることがわかる。また、それぞれ、勉強をする意味や、具体的な内容を答えている幼児は多かった。

(3) 出生順位による小学校に対する認識の違い

(1) で述べたように、第一子と第二子以降の幼児は、文字数と単語数に差がそれぞれあった。そこで、今度は出生順位の違いによって認識の違いがあるのかどうかを分析する。

まずは、小学校のイメージを第一子の幼児と第二子以降の幼児のどちらが回答したのかをわかるように分類し、次のような結果となった。

表3 第一子と第二子以降の幼児が持つ小学校に対するイメージの違い

	第一子	第二子以降
勉強のイメージ	2	3
身体活動をしているイメージ	2	5
物理的環境をイメージしたもの (屋外) (屋内)	8 (屋外) 6 (屋内) 2	8 (屋外) 4 (屋内) 5
対人関係のイメージ	0	4
学校での生活をイメージしたもの	2	4
一緒に行動をするというイメージ	0	2

表3を見ると、第一子の幼児はほとんどが建物や場所といった屋外に関するイメージのみを答え、具体的な内容までは答えていないことがわかる。一方、屋内の環境や対人関係のイメージなどといった具体的な内容を回答しているのは、ほとんどが第二子以降の幼児であることがわかる。また対人関係については、第二子以降の幼児のみが回答しているなど、多様な情報を持っていることが分かる。きょうだい間での情報取得がこうした結果に影響していると考えられ、文字数や単語数が多かったことの原因であると考えられる。

(4) 出生順位による勉強に対する認識の違い

さらに、勉強のイメージについて第一子の幼児と第二子以降の幼児のどちらが回答したのかをわかるように分類し、表にした。

表4 第一子と第二子以降の幼児が持つ勉強に対するイメージの違い

	第一子	第二子以降
保護者から得たイメージ	6	0
きょうだいから得たイメージ	0	6
その他の人から得たイメージ	4	2

ここでの回答で、第一子は、「なぜ勉強が必要か」ということを答えており、勉強の内容についてはほとんど述べていないのに対して、第二子以降の幼児は勉強の具体的な内容について述べていた。ここでもきょうだいは重要な情報源と考えられ、保護者等が主な情報源の第一子との違いが見られた。

(5) 幼児の小学校への不安

次に、幼児が小学校進学に対してどのような不安を抱えているのか、その際に、学校に関する知識を多く持っていることによって不安は軽減されているのかについて分析する。大人の目線で見ると幼小連携で重要なことは幼児の小学校に対する認識を深めることである。ここで予想されるのは、認識が高ければ幼児の不安は解消されるということである。

幼児の不安傾向を探るために、幼児に対するインタビューで「小学校に入ることで何か心配なこととかはない？」という質問をしていた。その結果を大まかに分類すると以下ようになった。

・幼児の小学校への不安

※第一子の回答には下線を引いている

(勉強関係) 2 ・「恥ずかしいねん、はいて手一挙げんのん」「お勉強したくない」
(友達関係) 1 ・「〇〇くんが一緒のクラスになったらちょと…」
(知らない人への不安) 4 ・「喧嘩とかしないかなーとか」「いじめられる」「お友達ができないとか、その勇気がない。5人くらいに殴られるかも」「仲良くできないかも」
(給食関係) 2 ・「給食とかどきどきする。嫌いなものがでてくるとか」「一年生になったら給食とか、お腹いっぱいになったら心配」
(学校の活動に関する不安) 2 ・「早起きとかはちょっと、どきどきする」「給食食べた後にお掃除するのとか嫌い」
(建物に関する不安) 1 ・「2年生になったら、階段あるし、地震がきたとき下りる人が遅かったりしないか心配」

(保護者と離れる不安) 1

・「お母さんと離れること」

(ない) 4

・「そんなこと考えたことない」「ない」「別にない」「ない、だって、お兄ちゃんが教えてくれんもん」

このように、幼児は様々な不安を抱えていた。第一子の幼児と第二子以降の幼児の間で明確な差はなく、11名の幼児が不安を抱いていた。第二子以降の幼児も、知らない人がある、給食、学校の活動、建物、保護者と離れる、などといった様々な不安を感じていた。勉強に関する不安はなかったが、認識が高いことによって不安が解消されるかどうかは、この結果からはわかりにくい。不安に関しては、今後さらに調査する必要がある。

次に、「知らない人への不安」を訴えた幼児は4名いた。これは他の幼稚園から来る知らない児童に対し不安を感じているものであり、幼稚園と小学校の縦断的な連携だけではなく、近隣の幼稚園同士の横断的な連携が必要になってくると考えられる。

また、給食に関する不安の回答もあった。兵庫K幼稚園では交流給食を行っているが、ここで出た給食に関する不安が、交流活動の結果によるものかは知り得なかった。しかし、子どもたちがこのような具体的で、ともすれば些細なことと思われるようなことに不安を感じているということは明らかとなった。こうした視点は、実際に子どもたちからの言葉でしか捉えられないものである。

(6) 児童が振り返って感じる小学校への不安

次に、ここでは小学校に入学後の児童に幼児期の不安を再確認してもらい、その不安が解消されたかどうかを分析する。「小学校になる前はどんなことが不安だった？」という質問を児童にした結果は以下の通りとなった。

ここでも「知らない人への不安」に関する回答が多くあり、この傾向は、特に第二子以降に強く見られた。

表5 第一子と第二子以降の児童の不安

	第一子	第二子以降
勉強関係	2	1
知らない人への不安	1	4
給食関係	1	1
建物に対する不安	1	0
きょうだいに対する不安	0	1
ない	2	2
覚えていない	1	0

ある児童は、「家の近くにあんまり友達おらへんから。友達があんまりおらへんねん。(中略)だから、友達が

どんな友達かなーって思ってた。〇〇ちゃんが一緒のクラスになってよかった。」と回答していた。この児童はなかなか友達ができないことに不満を持っていた。子どもたちの意見から察すると、1年生の彼らにとって仲良くなるために必要なのは幼稚園で行っていた「遊び」のようである。この場合、授業開始前や業間などの無意図的な遊びの時間を想定するのではなく、幼稚園で行われているような環境設定をする必要があり、教師が働きかけることで友達を作れるような「遊び」をそこで考えなくてはならないであろう。

次に、勉強に関する不安を見てみると、回答は少なかったが、その中で、「勉強大丈夫かなと不安だった。簡単だなと思ってたけど、難しいともあったからどうしようかなと思った。」という回答があった。この児童は、学校での好きなことは「学習、足し算とか」と答えているが、少しでもわからないことがあると不安になるようであり、不安が持続していると言える。こういった不安が重なって不満となり、それが勉強に対する意欲を低下させることにつながる可能性がある。

(7) 幼児の小学校への期待とその後の不満

次に、不安とは逆に幼児が小学校に対してどのような期待を持っているのか、またその期待は小学校入学後どのように変化しているかを明らかにする。そこで、幼児へのインタビューでの「小学校に入ったらどんなことしたい?」という質問を見ていくことにする。質問回答は以下ようになった。

・幼児の小学校への期待

「勉強」・・・4人
「滑り台、縄跳び、キックベース、サッカー、ジャングルジム」・・・11人

質問の結果、一番多い幼児の回答は「滑り台・縄跳び…」などであった。15人中、11人も幼児が身体的活動に関する回答をしており、身体的活動を小学校でも続けたいという期待が窺える。このような期待が小学校入学後どう変化したかを、入学後に行った「毎日していることはなんですか?」という質問に対する回答から見てみる。

・児童の小学校での生活

<ul style="list-style-type: none"> ・ (わからない) 4人 「わからない。だって、やりたいことあるけどできないから。一輪車やりたい」「うーん…」「わかんない」 2
<ul style="list-style-type: none"> ・ (授業・科目) 4人
<ul style="list-style-type: none"> ・ (遊び関係) 7人

このように「遊び関係」の回答をしたのは7人であった。また、「一番好きなことは何ですか?」という質問

をしたところ「遊び関係」の回答をした児童も7人であった。これを見ると、個別で遊ぶことへの期待は叶えられているように感じられるが、わからないという回答も目立った。

身体的活動以外の期待としては、「勉強」という回答があり、4人が答えていた。その中の1人は勉強に対する期待を述べていたが、その他の3人は異なっていた。ある児童は「あんまり遊んでない…」と答えており、遊びに対する欲求が満たされていないことがわかる。また、この児童は「幼稚園と似ているところはありますか?」という質問に対しては「朝遊ぶところ」と答えていた。また、児童になってから「幼稚園の時に思っていたイメージと同じだった?」という質問をしたところ、「休み時間はいっぱいあるのかなーとか…2回くらいしかなかった。」と述べていた。この児童にとっても遊ぶ時間が足りておらず、不満が溜まっていると言える。他の児童も、幼児の頃に「いっぱい勉強したい」と回答していた児童が、幼稚園は「遊びとかめっちゃ長くて…楽しかった」と振り返り、小学校の遊び時間の短さを間接的に伝えていた。

以上の回答から、これらの児童は小学校の遊びの短さに不満を感じており、「勉強がしたい」という期待を持ちつつも「遊びたい」という不満が募っていると考えられる。これは、勉強に関する直接的な不満を述べている児童はいなかったことから、授業が悪いのではなく、単に遊びの時間が足りていないのである。つまり、1年生だけでも遊びの時間を増やす必要があると考えられる。このように、遊び時間を増やすことで、児童はさらに授業に集中することができ、勉強に対する意欲が増すと考えられる。

もちろん、児童は小学校に対して、不満ばかりを持っているわけではなかった。「幼稚園の時に思っていた小学校のイメージと同じだった?」という質問をしたところ、「何もないと思ったけど、幼稚園より遊び道具が多かった」や「イメージと違うかった。こんなコンピューターなかった」と述べた児童もいた。この児童たちは小学校に対する期待が少なかったようであるが、来てみると新しい物があり、小学校に対して良い印象を持っていた。一方、「遊具とかあんまりない」と答えている児童もおり、小学校でも活動が豊かなものになると感じられるような環境の設定が必要と考えられる。

(8) 児童の小学校での不満

(7)では、幼児の小学校への期待が不満に変わったことを述べた。ここでは、さらに、児童は小学校でどのような不満を持っているかを分析する。児童へのインタビューで「逆に小学校で何か苦手なこととか、嫌なことはあるかな？」という質問をした。そこでは、次のような回答があった。今回の回答は分類せずそのまま取り上げる。

・児童の小学校での不満

- ・「ある。友達にイジメられる。それとか、聞いてくれへん。話を」
- ・「えーっと…俺の姉ちゃんと、学校でけんかをして、足がブッシャーってあたって鼻血出して。」
- ・「あるー、お兄ちゃんにいじめられるのが」
- ・「外で遊びたくない。だってな、休み時間にな、遅刻したことある。外いってって」
- ・「ない。でも、3組に嫌なことと言われる。なんか、負けろとか。うれスポのとき」
- ・「リレーとかで負けることが嫌やねん。困ったところな、ボール片付けんとボールが無くなったこと」
- ・「嫌われること」
- ・「怒られたりする。たたかれたり。嘘とか言うのが、ちょっと嫌い」
- ・「鉄棒とか」
- ・「ぶらさがるやつ」
- ・「一番嫌いなんといったら。生活かな。ずっと、あの、踊りとかを考えているから、おもしろくない」

このように、児童は小学校で様々な不満を抱えている。また、幼稚園の頃に「逆に何か幼稚園で苦手なこととか、好きじゃないことってありますか？」という質問をしたところ、その質問に対しては、9名の幼児が「ない」と答えていた。しかし、小学校で「ない」と答えたのは、わずか3名だけであった。この結果から、児童になると不満は増え、内容が具体的になっていることがわかる。また、「外で遊びたくない。休み時間に遅刻したことあるから」と回答した児童がいた。小学校では、時間に遅れてはいけないというルールが決まっておき、それを守ることができないと、怒られたり、注意されたりすることに戸惑っているのである。

他にも、ルールによって遊びができなくなった児童が2名いた。「小学校は、あのリレーがこうしかできないからなー」と答えていた児童は、幼稚園の頃からリレーが好きで、小学校でリレーができることを期待し、入学した。しかし、小学校のグラウンドは人が多く、リレーができずに直線の競争しかできなくなったようであった。また、「偉い先生とか、それでさ、できないと思うんじゃん。」と答えていた。さらに、「一年生はサッカー毎日やったらあかんって言われとるねん」と答えた児童もいた。サッカー好きのこの児童は幼稚園の頃は「毎日サッカー

やってた」といい、小学校に上がったなら「足が速くてサッカーが強い1年生」になりたいと答えていた。しかし、入学後、サッカーをすることを禁止されていることに、かなり不満を持っていた。片付けなかったことでボールがなくなり、サッカーができなくなったことにも納得していないようであった。

これらの回答に見られるように、子どもたちは小学校で大人の思わないところでストレスを溜めているようである。幼稚園とは違ったルールの存在や決め方があったり、上級生がグラウンドを占領してしまったり、といったことがその原因の一端である。こうした状況を変えていく努力や、上級生と交流や対話ができる場を確保する工夫などが必要であろう。

(9) 児童の幼稚園に対する認識と不満

次に、児童が1年生に上がった際の幼稚園に対する認識や不満について分析する。「振り返ってみて、幼稚園はどんなところだった？」という質問に対する回答を分類すると以下ようになった。

・児童の幼稚園に対するイメージと不満

※幼稚園に対して否定的なイメージには下線を引いている

(身体的活動をしているイメージ) [5]

- ・「小学校はすぐ帰るけどな、幼稚園は遊べて帰れる」「サッカー毎日やってた。」「幼稚園といったら、何かリレーが、みんなで流行ってたから (中略) みんながずっと俺を応援するから、それが何か嫌やった。縄跳びとか、コマとか」「遊びとかめっちゃ長くて…」「登り棒があって・・・」

<屋外の環境> [5]

- ・「楽しい場所とか。遊具とか、結構、滑り台とか、雲梯とか、鉄棒とかいっぱいある。」「いっぱい人がおった」「早い木がいっぱいあって」「えー、のぼり棒がちっさすぎて…」

(教師のイメージ) [2]

- ・「先生のな、お話とか恐いこととか苦手」「なんか〇〇先生怒るとき恐い」

(勉強のないイメージ) [4]

- ・「幼稚園は、宿題も何にもないところやった。宿題も何もない。帰ったらすぐ遊べる。楽しかった」「おもしろいけど、意味がない。え？だってさ、勉強とかさ、ブールとかさ、ちょっとしかやらへんし」「幼稚園の方が楽しかった。うーん…勉強しなくてすんだけど？遊ぶだけだから」「幼稚園とかはちっさくっても、まあ、勉強とかやから」

(わからない) [3]

この結果を見ると、全体的に児童が感じている幼稚園のイメージは肯定的であると言える。簡単にまとめると、児童は幼稚園に対して、「幼稚園は遊べて、楽しくて、遊具なども幼稚園の方が多かった」という認識をしていた。しかし、否定的なイメージを持っている児童は2人いた。その児童の回答は、「えー、のぼり棒がちっさす

ぎて…」や「おもしろいけど、意味がない。え？だってさ、勉強とかさ、プールとかさ、ちょっとしかやらへんし」などであった。また、幼稚園に対して遊具の大きさに対する不満を持っていたようである。

(10) 児童の視点から見た幼小の違い

最後に、児童は幼小の違いをどう感じているかを分析する。「小学校は幼稚園と比べて何か違うところはありますか？」と「幼稚園と似ているところはありますか？」という質問の回答を以下に分類した。

・児童が感じる幼稚園と小学校の相違点

(物理的環境) [22] <屋内の環境> [10] ・「テレビないねん。パソコンはなかった」「コンピューター室。階段とかあるから。体育館は多目的室しかなかったのに、あった。」「プールの横にカバーとかもなかった」「椅子はこんなじゃなくて、(中略)それでな、重ねんのが何でないんやろなって思ったな」「テレビがある!」「幼稚園はコンピューターとかがない」「幼稚園は、一階しかないけど、小学校は3階まである」「幼稚園って、絵本借りることってね、金曜日だけやねんで。小学校はいつも借りれる」「あんまり面白いビデオがなかった。ディズニーとか、アンパンマンとか、トーマスぐらいしかないもん幼稚園」「幼稚園は、本を借りるところが遊戯室と一緒にたけど、小学校では、図書室は図書だけであるから。ビデオない」「椅子がどなんかなーっと思って。」
<屋外の環境> [12] ・「こうやってでっかいやつ登るやつあるやろ?こんな四角いなん。あれなかったん」「広さが違う」「広さがちがうし、時計があるところも違う。でっかい時計」「運動場が広い」「遊具が少ない」「運動場が丸い」「学校広かった」「歩きがしんどい。遠いっていうか、まあまあ近い方やな。近いほうやけど、歩いとったら疲れる」「幼稚園の時は、やっぱり、人間が少なかったけど、で、幼稚園のときは結構俺が走ることが好きで、いっぱい走ることができたんだけど、小学校は、あのリレーがこうしかできないからな」「幼稚園の、登り棒とかが、色とか、ジャングルジムとか、太鼓とかある」「小学校よりちっさい」「幼稚園の方が小学校より小さい。小学校の方が先に出来たから。お兄ちゃんが言った。幼稚園って狭いからブランコないねん」
(内容の違い) [7] ・「授業とかな…」「幼稚園は勉強なくて、学校は勉強ある。でも幼稚園おやつとかあるから」「宿題とか。時間がながいとか」「学校は、あんまり、テレビとかなないけど、幼稚園には、よくテレビとか、なんか見れたり、学校とはなんか違う。わくわくキャンプとか星空カーニバルとか。幼稚園の時は、掃除は川の掃除とか、部屋なんかの掃除はあんまりせんくて。」「プールは、えっと、幼稚園に、タオルを置いたまま行った。それで、その間に、それ帰ってきたら、着替え、拭いて、着替えんねん」「勉強するところ」「幼稚園は、毎日お弁当じゃないのに、小学校だけは、毎日お弁当。給食」

・児童が感じる幼稚園と小学校の類似点

(物理的環境) [10] <屋内の環境> [3] ・「体育館、床が似てた」「ひとつひとつ部屋がある」「椅子がなんか似てる」
<屋外の環境> [7] ・「滑り台」[2]「プール」[2]「ジャングルジム」「運動場が丸い」「遊戯室はなんか似てた」
(遊べる時間) [3] ・「朝遊ぶところ」「休み時間があるところ」「休み時間」
(ない) [2]
(わからない) [3]

これらの回答のうち、内容の違いに関しては「授業」「勉強」「給食」などについての違いを述べていた。その中で、幼稚園でテレビを観ることや、様々な行事などについて楽しみを感じていた児童もいた。また、小学校では自分たちで掃除をしなくてはならなくなり、掃除の仕方やその評価などが変わったことに対して戸惑いを感じているようであった。他にも、プールの時間のタオルの置き場所といった、細かい生活習慣上のルールの違いに関して述べていた。同じような活動であっても、手順が異なっていることなどが、子どもにとって意外な負担となっているようである。このことから、1年生の担任は、児童らの就学前の経験についてある程度知識を得ておく必要があると考えられる。何か新しい活動を取り入れる際に、過去の経験を尋ねるなどして、どこに段差を感じる可能性があるかを見だし、詳細な説明を加えていくことが必要であろう。

表6 児童の視点から見た幼小の違い

	回答数 (相違点)	回答数 (類似点)
物理的環境	22	10
(屋外)	(屋外) 12	(屋外) 7
(屋内)	(屋内) 10	(屋内) 3
内容の違い	7	0
遊べる時間	0	3
ない	0	2
わからない	0	3
合計	29	17

これら幼稚園と小学校の相違点を聞く質問に対しては、他のものに比べて最も回答の量が多かった。表6を見てわかるように、児童は相違点については内容の違いのみ

ならず、物理的環境についても多くの回答をしており、「ない」や「わからない」と答えた児童はいなかった。数量的にも、児童が違いを感じている部分は、小学校の活動内容というより物理的環境であると言える。

一方、幼小の類似点については、相違点と比べて回答数も減っており、「ない」や「わからない」と答えた児童もいた。その内容は主に物理的環境についてであるが、屋外の回答数は7で屋内の回答数は3となっており、屋内の環境についての類似点はあまり見つからなかったことがわかる。一方、物理的環境の相違点に関する回答数は、屋外が12で屋内は10と、その数が拮抗しており、児童は物理的環境の中でも屋内の環境に対して「段差」をより感じているようであった。

そこで、屋内の環境についての回答の内容を見てみると、コンピュータやビデオ、図書館や本の有無などといった教材の違いを取り上げている。幼稚園では絵本の貸し出しは金曜日だけだったという回答もあり、自分が興味関心のある情報をすぐに手に入れられるという点に小学校の魅力を感じていたようである。また小学校で、図書室が独立していて資料が豊富に揃っていることや、コンピュータなどの機器が備わっていることなどによって、幼稚園との情報量の違いを指摘されている。幼稚園では絵本などを担任から提示してはいるが、幼児自らいつでも本を探ることができるような環境が整っていなかったことが考えられる。この結果から、幼稚園では幼児の学びの意欲を促進させるための環境の整備が不十分であったことがわかる。このインタビューでは、幼稚園の環境について、児童の立場から遡及的に述べてもらっているが、そのことを考慮に入れたとしても、幼稚園における学びの環境をどのように整えていくかということについては、今後検討されるべき課題となるのではないだろうか。

4. 考察と今後の課題

4.1 考察

これまでに述べた結果と考察をまとめると、以下の8点にまとめられる。

(幼稚園の改善点)

- ・ 小学校や勉強に関する認識の差
⇒ 保護者から幼児への情報伝達
- ・ 幼児の知らない人への不安
⇒ 横断的な連携
- ・ 幼児の給食に関する不安
⇒ 交流活動でのより詳細な説明
- ・ 児童の幼稚園に対する不満
⇒ 興味関心に沿った環境の設定

(小学校の改善点)

- ・ 知らない人への不安の持続
⇒ 交流時間の設定
- ・ 遊び時間への不満
⇒ 遊び時間の確保
- ・ 身体的活動ができないことへの不満
⇒ 環境の設定
- ・ 幼小の些細な違いの認識
⇒ 詳細な説明

本調査の結果からは、今後幼稚園や小学校で必要とされている様々なことが読み取れる。幼稚園では就学前の幼児を持つ保護者を対象に、就学前段階の幼児に対して小学校に関するどのような情報を伝達する必要があるかを詳しく説明するような機会を設ける必要がある。また、近隣の幼稚園・保育所などが連携して参加することで、幼児同士の交流を図ることができ、「知らない人への不安」を少しでも解消できよう。このような活動を小学校で開催すれば、幼児の小学校に対する認識を深めることができる。その際、幼稚園・保育所の保育者と小学校の教師が協同して関わることで、実践を踏まえながらお互いのことについて学ぶ機会が得られるであろう。

幼稚園・保育所としては、小学校へ進学することに関する保護者への情報発信という、重要な役割を担うべきであり、保幼小の縦断的交流だけではなく、幼稚園と幼稚園、幼稚園と保育所といった横断的交流も必要となってくる。このような縦断的・横断的交流によって、子どもの育ちや思いを共有し、子どもの視点に立って教育計画を立てていくことが重要である。その意味で、本研究から得られた知見は、就学前から小学校への円滑な移行を支えるために意義あるものと考えられる。

4.2 今後の課題

最後に、本研究の今後の課題を5つ述べる。まず1つ目は、今回の対象は幼稚園児のみであり、保育所の幼児は含まれていなかったことである。また、本研究の対象者は15名であったことから、今後より多くのデータを収集し、それぞれの幼稚園や保育園での結果を比較する必要があると言える。

2つ目は、第一子の幼児・児童と、第二子以降の幼児・児童の間で、小学校に対する認識がどのように違うのかという点について、さらに詳しく検討することである。そのためには、インタビューを行う際に、出生順を考慮に入れたペアリングの構成を行う必要がある。さらに回答内容について情報源を特定すること、その情報の獲得過程がどのように子どもたちの認識を変えていくかなどについて、さらに深く聞き取っていくことなどが考えられる。

3つ目は、質問内容の具体化である。本研究は、Sandersら（2007）の研究と、進野ら（2000）の研究を元に、インタビューでの質問項目を考えたが、その質問項目の中で、「自分が幼稚園で何かしている絵を描いてみてくれないかな？いつもしていることとか、何でもいいよ。」という質問がある。これに対して、この質問をしてもなかなか絵を描かない幼児もおり、そのような子どもに対しては、他の質問をしながら考えてもらうことで、今回は全員が絵を描いてくれた。絵をなかなか描かない幼児は、そこで絵を描く必要性を感じていなかったのではないかと考えられる。また、他の質問内容に関しても、時間の関係上どうしても単調になってしまうこともあった。児童に不安に関する質問をした後は、「その不安だったことはもう大丈夫なのかな？」などといった、より具体的で子どもにとって意味のある質問が必要であったと言える。インタビューを構成する際に、さらに子どもの立場や視点に立って考え、方法を改善していかなければならないであろう。

4つ目は、インタビューの結果から導きだされた具体的な改善点を盛り込んだ連携活動を実際に各幼稚園・小学校で行い、その成果を調べる必要がある。

最後に5つめとして、幼児・児童が捉えた幼小の段差を踏まえ、幼稚園や保育所などで行われる就学前教育がどのような姿であるべきかを見直していきたい。また同時に、小学校における教育内容や方法がどのようなものであるべきかを考慮し、交流活動のみにとどまらない、総合的な幼小連携のカリキュラム作成を目指していきたい。

<引用・参考文献>

- 吉田 正幸『幼稚園と小学校の連携方策』フレーベル館2005
- 西山 薫「幼保小の連携の方向性と今日的課題－連携の諸相と問題点を中心に－」『清泉女学院短期大学研究紀要第21号』p.106 2002
- 林 信二郎「幼稚園教育に対する小学校教師の認識と期待に関する研究（1）－幼稚園教育に関する理解と期待－」『日本保育学会第48回大会研究論文集』pp.30-31 1995
- 細川かおり・伊藤輝子・岩崎洋子「来年度入学予定児の小学校入学に対する不安と期待に関する研究（1）－子どもおよび保護者の不安について－」『第51回大会日本保育学会発表論文集』pp.456-457 1998
- Sanders, D., White, G., Sharp, C., Eames, A., McEune R. and Grayson, H. (2005) A study of the transition from the Foundation Stage to Key Stage 1, National Foundation for Educational Research
- 進野智子・小林小夜子「幼稚園から小学校への移行に関する発達心理学研究Ⅲ」『長崎大学教育学部紀要－教育科学－』第

59号 2000

(2008. 9. 1 受稿, 2008. 11. 28受理)